Step up MRI 2013

V　ISMRMから読み解くMRI最新動向

1．臨床の視点から見たISMRM2013のトピックス

高原　太郎　東海大学工学部医用生体工学科

満20年を過ぎたISMRM・ソルトレイクシティ

ISMRM大会は，今回で21回目を迎えた。SMRとMRIが前身となる本会は，これらの時代も合わせ，MRIの歴史は“two decades”を満了し，次の10年に入ったことになる。初期の参加者の漠然とした意識は，「10年間は高度に発展し，次の10年間で成熟（を完了）する」といったものだったので，20年を経てなお発展し，さらに高度になっていくMR技術には驚くばかりである。従来，ISMRMには技術的な発表が多く，参加した放射線科医はいつもいくばくかの当惑を感じる学会なのであるが，技術が高度になるにつれ，簡単な説明を心がけていても，それなりに難しくなってしまい，あたかも赤方偏移が宇宙の普遍的な事実であるかのように，臨床医とMR技術との距離も時とともに離れていっている印象を持つ。MR研究を行う医師は，明らかに新規参入者が減少しており，高齢化が進んでいる。これは，臨床医がMRI装置のそばにいなくなったこと（撮像に携わらなくなったこと）と直接の関係もあり，不安を感じる今日この頃である。臨床的な観点が多く入った研究はきわめて重要であるので，**臨床医がMRI装置に触れる教育機会を作るべき**ではないだろうか。これには，医局と技術部門の相互の理解が必要であると感じている。

図1　米国上空の機内における WiFi接続サービス

ISMRMは，最近では，北米（米国・カナダ）とそれ以外の地域での交互開催が慣例となっているが，今回は北米の年で，米国ユタ州のソルトレイクシティで行われた。しばらく前から米国上空はWi-Fi接続ができるようになっていたようだが，今回初めて利用してみた。**図1**は，Facebookにアクセスしている様子である。便利になったものである。

筆者は車好きで，庶民的車雑誌であるところの『ベストカー』などを，ごく最近まで欠かさず精読していたのであるが，20年余り前のRX-7（FC3S）の時代に，当時ロータリーエンジンのチューナーとして有名だった雨宮勇美氏が，一面の塩の上で最高速度記録に挑戦した，という写真付き記事を読んだことがある。それ以来，「めったに行けないところだけれど，いつかは行ってその風景を目の当たりにしたい」と思っていた。その機会がかなった学会でもある。ソルトレイク（塩湖）の西端に，**ボンネビル・ソルトフラッツ**という真っ平らな塩の平原がある（**図2**）が，運良く天候に恵まれて，硬く締まった塩の上をプライベートツアーの車が窓を開けて走ってくれたのは爽快であった。他車がわれわれのそばを通り過ぎ，彼方に達すると，蜃気楼で豆粒のような車が地平から離れ，あたかも空に浮かぶように見えたのは新たな驚きである（**図3**）。新しい経験は，常に新しい

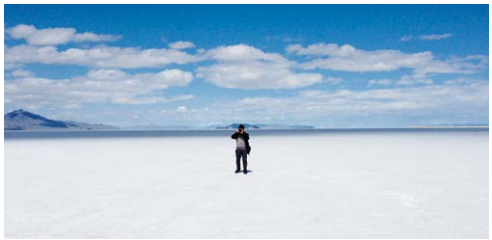

図2　ソルトレイクの西端にある ボンネビル・ソルトフラッツ（塩平原）
カメラを構えているのは日本医科大学の関根鉄朗先生

図3　地平に達した車が蜃気楼で浮かぶ様子

〈0913-8919/13/￥300/ 論文 /JCOPY〉